

# 『サイラス・マーナー』の主人公から学ぶ 高齢期の生きがいについて

小野 ゆき子

## 1 はじめに

本稿を書くにあたり、私が「高齢期の生きがい」について関心を持った経緯に少々触れておきたい。

10年ほど前であろうか。「定年退職後の高齢者の生きがいやボケ」など、高齢者に関わる諸問題をマスメディアが取り上げるようになった頃である。当時、私の両親は84歳と78歳の高齢後期に入っていた。彼らの心配は世の中で取り沙汰されているボケの状態に自分たちが陥っては大変と考える一方で、絶対に私たちはそのような状態にはならないという自信のようなものを持っていた。しかし好むと好まざるとに関わらず、何かのきっかけで、自らが自らをボケの状態に追いやる場合もあれば、周囲によってボケの状態に追い込まれる場合もある。どんなに教育程度が高い人であろうとも、どんなに多くの趣味を持っている人でも、また手先の仕事をまめにやる人でも、目的意識を持って生きていない限り、ボケの可能性から逃れることは出来ないのだということを両親の生活を通して知った。

「人」という文字がお互いを支えあうことを意味するように、両親も約50年間お互いを頼りに生きてきた。そうした夫婦生活に、ある日突然起こった配偶者の死は、残された者の人生を思ってもみなかった方向に変えてしまう。

80歳前後の年齢は、身近な人との永遠の別れが多くなる時期である。私の母の場合も、前年に親友を亡くし、気持ちが落ち込んでいた。それに追い討ちをかけるように、夫の突然の死である。彼女の気が動転したのも当然である。父が死んでからは、母は生活すること全般にわたって自信をなくし、先の人生に、何の目的も楽しみも持たなくなった。

人間は、何か目的があるからこそ人生を楽しく生きられるのであって、その目標を見出せなくなったその時から、気は落ち込み、精神的には鬱の状態になるようである。多くの場合、家族、友人に励まされ、何とか精神の最悪の危機を脱するのだが、母の場合は、それは望めず、誰をも彼女の心の奥にまで、入り込むことが出来なかった。当人自らがそうした最悪の状況から、抜け出す方法を見つけ出さない限り、すなわち明日を生きる目標を見つけ出さない限り、正常な生活にすら戻ることは出来ない。私には母を失意のどん底から救い出す方法がなかなか見つからなかった。

母はそれまで好んでやっていた読書や趣味の多くを、自らの生活から抹消してしまった。母と同じような趣味であっても、自分がその状況から逃げ出すことによって他人に迷惑をかけたり、あるいはそれによる収入が少しでもある場合は、責任上、自分が嫌だからといってその状況から逃げ出すような勝手な行動は出来ないはずである。しかし、単なる趣味の場合は、自分の都合で自由にどうにでもなる。嫌だと思ったらやらなくても他人に迷惑をかける心配などない。気楽といえは気楽ではある。しかしいったん自分に甘えが出て、前向きに生きる行動を維持できなくなると、人にもよるが、自分で立ち上がれなくなってしまう場合もある。

母は楽しみなどない闇の生活に、入り込んでしまった。一日中黙りこんで、家から一歩も出ない。だんだんと足腰は弱り、そのうちに床から起き上がれなくなった。周りの人との会話も少なくなり、その結果、言葉による表現力が見る見るうちに衰えていった。

彼女に社会と繋がりのある、何か趣味を超えたもの、わずらわしくても何らかの義務感を伴うものがあつたなら、彼女の晩年は大きく変わっていたであろうと想像する。

こうした経験から、高齢期の知的精神生活を支えるものは何か、それは生きがいとなるものを見つけるということか、また生きがいを高齢になつても維持するためには、いわゆる生涯教育というものは有効なのかを真剣に考えるようになった。専門的に学んでみようと、4年程前に、大学院で「生涯教育」を専攻した。その修士2年の間で私なりに出した結論は、高齢期をよりよく生きるためには、何らかの社会的責任を伴う仕事か、周囲に公言する生活の目標を持ち、人生における「真の生きがい」を見出すことが、いかに大切であるかということである。

今まで、英文学にのみ持ってきた関心を生涯教育にも向け、かつ英文学の中に書かれた作中人物の生き方に、生涯教育の大切さを見出していきたいと試みた。これが本稿を書く動機である。

## 2 高齢者の生きがい

生きがいとは具体的にどういうことを意味するのか。「生きがいを持つことは良いことだ」と口では簡単に言えるが、実際には、その生きがいを見出すことは難しく、特に高齢期にはいった人々にとっては、なかなか見付かりにくいものである。高齢期になって、生きがいが見つからないまま生きているのは、母の場合も含め、悲しいばかりか、精神的にもその人をだめにしていく。生きがいがないことが原因となって、家に引きこもりがちとなれば、身体の機能は衰えていくであろうし、寝たきりになるということも考えられる。自分以外の人との会話が少なくなればなるほど、脳の働きは鈍くなり、それが原因で廃用型痴呆<sup>1</sup>（脳を使わなくなることによる老人のボケ）になりやすくなる。現在、世間で言われている痴呆のほとん

どが、脳を使わないことによって生じるこの廃用型痴呆で、全体の約90%を占めている。残りの10%が血管性の病気による痴呆（4.8%）と二次性痴呆（2.4%）、側頭葉性健忘症（1.7%）などで、世間が心配するアルツハイマー病は、僅か1.1%にすぎない<sup>2</sup>。単に脳や身体を使わないことによる老人性痴呆が多くなることは大きな社会問題である。

現在、日本人の平均寿命は伸び続け、人生80年時代を迎えた。この半世紀で、30年以上寿命が伸びた。国連の定義によると、65歳以上の人口が全体の7%を超えた社会を高齢化社会というが、「厚生労働省の人口動態統計によると、日本の65歳以上の人口が2010年には20%に近づき、しばらくは3000万人前後を維持することになるという。しかも、100歳以上が1995年に6378人であったのが、2000年には13036人まで伸びている<sup>3</sup>」。まさに高齢化社会というより、「高齢社会」である。

この高齢社会においては、60歳から65歳で定年を迎え、あとはおまけの人生と考えるのは、人生50年の時代ならともかく、今の時代には向かない。それなら定年や子育て終了後の人生をどのように生きてらよいか、何に生きがいを見出すべきか。これが本論のテーマである。子育て、あるいは家族のために働くといった重責ではなくとも、社会との関わりを何らかの形で持った第二の人生を送るべきであろう。関わりを持つということは大なり小なり、権利義務の関係を生じたり、ルールを守るなどの社会的制約を受けたりする。なぜそこに制約が必要なのか。制約があれば、それを守るために人間は努力するし、そのためには身体も脳も使う。社会と関わることによって、使わなければ急速に衰えていく人間の身体や脳の老化を防ぐこともできる。

しかし、今、60歳以降からの長い人生を、いきいきと生きている人の数は、まだまだ少ない。急速に高齢化が進んだため、高齢者にとってどのような生き方をするのが、満足のいく人生を送ることになるのか、社会も個

人も戸惑ったまま、試行錯誤の状態が続いているのが現状だと考えられる。

電車の中で交わされる高齢者同士の会話を時々耳にするが、「次の旅行はどこに行こうか」や「日本経済の立て直しはどうしたらよいか」など前向きな話題よりも、「からだの調子が悪い」話や、高齢期になって痴呆になることを恐れるあまり、「周りの人々に迷惑をかけないうちに死んだほうが良い」などといった後向きの会話が多いのが気になる。「生きがい」など、その会話のなかに見出すことは難しい。

スケジュールがぎっしり詰まった、どちらかというところ、余暇を見出すことが困難なほどの忙しい生活を送っていた人たちが、子育てを終了した頃から、または退職したその翌日から、「24時間すべてあなたのものですから、自由に使いなさい」と言われた時、仕事、子育てに代わる生きがいが急に見つからず戸惑ってしまう。

若い時から、仕事と余暇をバランス良くこなしてきた人は別であるが、「大変だ」といいながらも、仕事や子育てが気づかないうちに、「生きがい」になっていた人たちは多い。忙しい仕事の合間を見つけて、趣味や楽しみを持つことは喜びにつながるが、丸一日すべての時間を趣味だけで生きるのは楽しみというよりもむしろ苦痛になる時さえある。学生時代の定期試験の際に、この試験が終わったら、「あれもしよう」、「これもしよう」と思いながら、終わってしまうと、「いつでもできる」ということから、やろうと思っていたことが、どうでも良くなってしまったという経験と、相通じるように思われる。

さて、「24時間が自由に使える」とは、忙しい立場に身を置いている人には、うらやましく聞こえる言葉であるが、何の社会的制約もないために、自分で自分をコントロールしなければならない。それも1週間や1ヶ月ならまだしも、生きている間ずっとである。制約がなければ、ともすると、自分に甘くなり、規則正しい健康的な生活が送れなくなる可能性もある。仮

に趣味を多く持っているとしても、毎日を趣味だけで埋めるのは難しい。

社会の一員として何か社会の役に立つこと、結果として社会から何らかの評価を受けることが出来るものがあれば、それが社会的制約となり、それを行うための向上心も高まるという利点がある。同じ人間の一生なら自分にとって「何が真の幸せか」を考え、自分なりに幸福を追求し歩むことが出来るようになれば、それが生きがいとなる。加えて時代と共に生き、新しい時代を作り上げる側に立って生きることが出来れば、それはなお有意義な、生きがいある人生となるであろう。

ブッシュ米国大統領が票集めのために、高齢者が多く住むフロリダに行ったことは記憶に新しい。アメリカ退職者協会が「ダメ」と圧力をかけている法案はめったに議会通过しないため、政治家は高齢者の意向を無視出来ない。すなわち高齢者の意見が政治によく反映されているということである。自分たちの居場所は自分たちの力で守るという姿勢である。またケネディ元大統領の言葉、「社会が自分たちのために何かをやってくれるのを待つのではなく、自分たちが社会のために何をすることが出来るかを考えよう」も、自分の人生を有意義に過ごすための大切な基本姿勢を述べた言葉として思い出される。

### 3 日本における平均的な高齢者の生き方

さて60歳以上の半数がテレビは必需品であると考えている。高齢者の生活意識に関する1995年総務庁（現総務省）の調査によると、「約2500人（65歳以上、うち80歳以上286人）のうち女性77.8%、男性81.4%がテレビを見ることを楽しみとしている。次いで、新聞、雑誌を読むこと（それぞれ、28.4%/47.2%）、旅行（29.5%/31.8%）である<sup>4</sup>。またNHK放送文化研究所の最新の資料から日本人の平均的テレビ視聴の実態を調べた結果を見ると、「NHKの総合は60代で2時間弱、70代以上で、2時間20分程度、民



放テレビ系は60代、70代以上ともに、3時間前後<sup>5)</sup>である。単純に計算すると、NHKと民放を合わせて総計5時間から5時間20分となっている。この統計を見る限りでは、高齢者にとってテレビを見ることは、生活の大きな一部になっているように思われるが、かならずしも喜んで見ている人ばかりではなく、テレビがついていると、自分以外の人の動きを感じられるので安心という人もいる。

この他に、カルチャーセンターに行ったり、ボランティア活動に参加したり、シルバー人材センターに名前を登録したりと、いろいろ参加してはみるものの、仕事一筋に生きてきた人々にとって（特に男性の場合であるが）、それらは緊張感が伴わないせいか、必ずしも満足できるものではないようである。場を提供する側にも試行錯誤の面があり、高齢者の真の生きがいにどうつなげるか考慮不足の点も見られる。高齢者側も、ただ興味本位で、何を学び、それをどのように自分の生きがいに繋げていくか意識していない場合も多い。

上記のような定年後の高齢者の生活状況は、日本人の国民性に起因するものとも考えられる。日本人の性格の特徴を表すものとして、興味深い記事を読んだことがある。客船が沈没しかけた時、乗客の数だけの救命ボートがないことに気づいた船長が、乗客に「救命ボートには全員は、乗れないため何人かは海に飛び込み、助けを待つ必要がある」旨を伝えようとした。それぞれの乗客の国民性にあった説得の仕方を試みた。日本人に対しては、「他の皆さんが飛び込まれますよ」といって、納得させようとしたという笑い話である。これからもわかるように、日本人は確かに皆と同じ行動をしていれば安心といった国民性がある。定年を間近にひかえた人、定年退職後間もない人は口をそろえて「定年後は悠悠自適の生活を送りたい」と言う。上記の数字が示すように、テレビを見て一日の大半を過ごすことも、皆と同じ行動なのである。カルチャーセンターに行ったり、ボランテ

ィア活動をしたりするのも同様であろう。社会にもそうした状況を肯定する傾向がある。いつまでもこうした状況を続けていて良いのであろうか。これからは高齢者がそれぞれの真の生きがいを追求できる社会の実現をめざすべきであろう。国や自治体の計画のなかにいろいろな生き方を支援する具体的な施策が織り込まれることを期待したい。また高齢者自らが、その計画を立てる段階から積極的に参加していくことが望まれる。

ここで、より豊かな高齢期の過ごし方を研究する学問「老年学」について簡単に触れてみたい。

#### 4 老年学とは

老年学とは、日本社会の高齢化より一足先の1970年に高齢化社会を迎えたアメリカで、ミシガン大学の大学院博士課程に、「教育老年学」という講座が開かれたのが始まりである。

アメリカの教育老年学の第一人者とされているデビッド・ピーターソン (Peterson, D.A.) によれば、「1980年に教育老年学を、高齢者の生活を向上させるためにエイジング（加齢、老化）と教育に関する知識を拡張・応用していく試みとしてとらえるようになった<sup>6</sup>」という。教育老年学の中で研究されるべきものは、「高齢者の置かれている状況を理解する」「高齢者の置かれている社会的不利益状況に関する一般市民の認識を深める」「学校教育における高齢者問題のプログラム開発」「マスメディアを通しての高齢者に対するステレオタイプの是正」「家族員に対する高齢者問題に関する情報提供」「高齢者へのサービスやプログラム開発に必要な知識・技能の把握」<sup>7</sup>などとされている。

人間の一生を幼年期、青年期、中年期、老年期と、4期に分けてみる。幼年期は措くとして、それぞれの期にあわせた教育について考えてみよう。

青年期の教育は、「知識や経験の不十分さを知って、それらを補い身につ



けていこうとする……将来への準備<sup>8</sup>」のための教育である。中年期の教育では「個々の生活環境に応じた社会的役割による課題のウェイトが増し……当面の課題に結びつく<sup>9</sup>」勉強が必要である。現在自分のおかれている状況を自分なりに把握し、それを充実させ、更なる発展を学ぶことを目的とする。すなわち、青年期、中年期の教育は、その教育内容を生かし、実社会において実践応用を可能にするための教育である。

人生50年の時代では、こうした青年期や中年期までの教育内容を生かしていく過程で、人生が終わっていた。そのため、老年期の教育は必要なかった。しかし、医学の進歩と共に寿命が延びた今でも、教育は、中年期までの内容にとどまり、それから先の教育がなされていない。それから先の老年期は、「おつりの人生」と考えられていたからである。

高齢期に入りかかった、または高齢期にある人々に対する、生きがいのある人生を送るための教育は、日本の社会ではまだ準備が始まったばかりである。

時期が来れば、子供は成長し、子育ては終了する。よって子育て終了時期は人生50年の時代とあまり変わっていない。また仕事においても、定年退職制度がしかれている日本の社会では、暦年齢だけの理由で、第一線を退かざるを得ない。その定年退職年齢も、以前とあまり変わっていない。むしろ昔の方が人生が短かった分だけ、生きている間はほぼ仕事についていることが出来たと言えよう。

ダグラス・H・パウエル (Powell, D.H.) は「最適の老化とは、肉体、認知能力、社会性、心理状態を、出来るだけ長期にわたって、維持することに他ならない<sup>10</sup>」「さまざまな体験を自ら進んで受け入れることが出来る高齢者は、変わり映えのしない日々を送っている高齢者より、認知能力テストにおいて高い得点を得ることが出来る<sup>11</sup>」という。さらに彼は、まだ機能を若返らせることができる能力を持った高齢期前期、ならびに高齢期後

期の人たちの一部に対して「こうした人々が必要としているのは、労働の機会と動機づけと、意欲に他ならない。高齢でありながらなお働くことは、困難なことかもしれない。だが、そうすることによって、私たちは、人生の最後の4分の1を精一杯生き抜く可能性を高めることが出来る<sup>12</sup>」と説明している。すなわち、心身ともに健康な人は意欲を持って働きなさいと言っているのである。確かに、アメリカでは、年齢を理由にした解雇は法律によって禁止されており、仕事を辞める時期は、必ずしも問題がないわけではないが、会社や社会が決めるのではなく、本人が、辞めたい、辞めなくてはと判断したときに辞めるという社会通念になっている。

青年期、中年期の教育が実社会において実践応用を可能にすることが出来るように計画された教育であるように、老年期の教育は、高齢者にとって人生最後の部分をどのように生きがいを持って生き抜くか、そして自分が抱いてきた目標の自己達成（自己実現）を目指して学ぶための教育として位置づけられよう。

人間の生き方、特に高齢者の生きがいある生き方についての示唆のひとつを、19世紀のイギリスの作家ジョージ・エリオット（George Eliot）の作品『サイラス・マーナー』（*Silas Marner*）<sup>13</sup>の主人公サイラスの生涯に見出すことが出来る。サイラスの変化に富んだ人生の中から、現代社会に生きる高齢者が生きがいを探るための指針を引き出すことが出来ればと考えている。

## 5 ジョージ・エリオットについて

『サイラス・マーナー』（1861年）の著者ジョージ・エリオットは本名をメアリ・アン・エヴァンス（Mary Ann Evans）という。当時、女性というだけで作家としては軽く見られてしまうため、男性名ジョージを名乗っ

た。

エリオットは1819年にイギリス中西部地方のウォーウィック州 (Warwickshire) の北部ナニートン (Nuneaton) の近くのアーベリー・ファーム (Arbury Farm) に生れる。父親は土地管理人で、前妻との間に2人、後妻との間に3人の子をもうけた。エリオットは後妻との間に生れた末っ子である。

彼女が9歳の時に転校した学校では福音主義者のミス・マライア・ルイス (Miss Maria Lewis) の影響を強く受け、熱心な信仰者であった。しかし大人になってから、キリスト教に疑問を持ち始める。

エリオットの母は18歳の時に死に、その翌年には姉が結婚したので家中の仕事の一切をエリオットがやっていた。そして一方では家庭教師につき、ドイツ語、イタリア語などを学ぶ。この間にワーズワス (William Wordsworth) の詩集を読み、ワーズワスの自然を愛する心に影響を受ける。『サイラス・マーナー』の本の扉に、ワーズワスの詩が載っている。

幼な児こそ、老いゆく人にとりて、  
この世の与うるいずれの賜にもまさり、  
希望と明日の日待つ思いをもたらずものなれ。

「マイケル」<sup>14</sup>という題のこの詩は生きがいをもたらしてくれるものとして幼児を挙げている。ワーズワスの詩の愛読者であったエリオットが『サイラス・マーナー』の中で、「生きがいある人生とは」をテーマとして書き進めていくのに、この詩から大きな力を得たことが窺える。

エリオットが21歳の時に兄が結婚し父の後を継いだため、父と共にコベントリー (Coventry) の近くに移り、父と二人で暮らし始める。その後、無神論者のチャールズ・ブレイ (Charles Bray) と知り合い、彼の仲間の

知識人たちとも付き合うようになる。彼らの影響もあってか、その後エリオットはキリスト教に疑問を持ち始める。作品の中で、サイラスは神に対して不信を抱いている人物として描かれているが、エリオットの考えそのものを主人公に投影していることになる。

父親はエリオットが29歳の時に亡くなり、エリオットの落胆振りは大変なものであった。しかしその後、ロンドンに出て、以前から寄稿していた定期刊行物の『ウェストミンスター・レビュー』(The Westminster Review) 誌の副主筆になり、執筆活動を始める。

彼女は『ミドルマーチ』の中で人間の活動を織物にたとえており、「この「特別な織物」の糸となるのは個々の人間であり、織物となるのはその人々の生きざまである<sup>15</sup>」。人間が生きていく上で、他の人と関わりを持つ事によって織りなす人生は、その関わり具合が複雑になればなるほど、深みのある豊かな人生となる。他人と関わりを持つ人の人生は、他人と没交渉のまま自分の殻の中に閉じこもって生きる人の人生とは比較出来ないほど、味のある人生となる。人間同士の糸の絡みにより、その人生は光沢を帯び、それぞれの人間の持つカラーの交わり具合によっては、美しい模様を織りなすことが出来る。こうした人生は、その人の生きる姿勢によって異なり、面白い人生ともなれば、つまらない人生ともなる。作者エリオットはまだ35歳という若さで、面白みのある人生、それとは反対の暗い人生を作品の中に描き、サイラスという主役に、その二通りの人生を生きさせた。

今の社会に生きる高齢者の生き方にも、大きく分けてこの二通りの生き方が見られる。ひとつは、定年退職後、社会との関わりを持たずに家の中に閉じこもりがちになる生き方、もうひとつは、自ら進んで地域や社会に飛び込んでいき、今まで会社人間であった時、あるいは子育てに没頭していた時には味わうこともなかった世界のいろいろなことを、多くの人々か

ら学び、自分を磨いていく生き方である。

## 6 サイラスの生きがい

『サイラス・マーナー』は、ジョージ・エリオットが43歳のときに書いた小説である。主人公はサイラスとゴッドフリー (Godfrey) であるが、ここではサイラスの生き方に焦点を絞り、彼の生きがいが小説の中でどのように表現されているかを考察してみたい。

人間は考える脳を持った動物である。そのため青年期、中年期、老年期といった、それぞれの時期に、いろいろな心理的な課題を抱えるが、その課題を克服しながら、人間は成長していく。それぞれの時期において、生きがいの対象となるものが、異なる場合もあれば、初めから終わりまで、一貫して変わらぬ場合もある。

サイラスの人生では時期によって生きがいが変わっていく。彼は環境が変わるごとに、上手に自分の生きがいを見出し、その生きがいを全うしながら生きていく男として描かれている。その生きがいのなかには本心からの生きがいではないが、真の生きがいが見つかるまでの仮の生きがいとなっているものもある。

まず彼の青年期であるが、彼は宗教活動に、また仕事に、そして恋に自分の人生の生きがいを見つけ、毎日を有意義に過ごす。この青年期の途中で、自分が見つけた生きがいが信頼していた友デーデン (William Dane) と恋人セアラ (Sarah) の二人の裏切りによって崩されてしまう。

中年期にはこの裏切り行為がきっかけとなって、住み慣れた場所であるランタンヤード (Lantern Yard) からラヴィロウ (Raveloe) 村に居を移す。そして慣れない土地で、孤独なさびしい生活を送るが、こうした環境の中で、彼は新たな生きがいを見出そうと試みる。それは金貨を貯めることである。何故、金貨を貯めるのか。セアラとの結婚は、「お金がもう少

したまってから」という理由で、先延ばしにしていた。しかしその結果、サイラスが信用していた友人にセアラを奪われてしまう。このことが遠因となった金貨を貯める行動は、彼の真の生きがいと言えるものではなく、自分が生きていく上での生活の目標として、彼が仮に立てた生きがいである。しかしこの中年期の生きがいも心無い何者かによって崩される。彼のためていた金貨がそっくり盗まれてしまうのである。彼の落胆はとても大きい。毎日、金が戻ってくるのではないかと、戸口を開け放しておく。数週間が経った時、エッピー (Eppie) というかわいい女の子が、開け放した戸口から入ってくる。この子が彼の最終の時期、老年期に彼の生きがいの対象となる。彼はこの子を育てることに、彼の人生のすべてをかける。

それでは、ストーリーの筋を追いながら、サイラスの生きがいについて考えてみたい。

サイラスはリンネル織工である。織工というと、当時は長いリンネルの反物を入れた重い袋を背負って、腰をかがめ、青白い顔をした人というイメージが強かった。彼もご多聞に漏れず青ざめた顔をした人物である。ラヴィロウ村に来る以前のランタンヤードでの生活は、「行動と旺盛な精神力と緊密な友情とに満たされた」(第1章)ものであった。彼はその頃、ある宗教団体に加わっており、模範的な生活を送る信仰の厚い人間であった。根は正直な男で、悪いことなどできるタイプの人間ではなかった。織工としての生活に満足していた。また婚約者がおり、二人の間では、「貯金が今より増えた段階で結婚しよう」という約束が交わされていた。彼の友人にウィリアム・デーというサイラスより少し年上の青年がおり、サイラスは「自分の考え方や性格とはまるで反対の者に頼りたい」という気持があつて、このデーのやることに疑いを持たず、彼との友情を保っていた。



しかしサイラスが友人と思っていたこのデーンは、実はしたたかな悪党であり、サイラスは彼の罠に嵌められてしまう。ある執事の殺人事件をめぐって、サイラスは殺人犯にされた上、金を盗んだという濡れ衣まで着せられてしまう。実の犯人はサイラスが親友と思い込んでいたデーンスその人であり、自分が犯した罪をサイラスになすりつけたのである。その上、サイラスの婚約者のセアラまで奪ってしまう。デーンを悪人として、訴えたい気持ちはあったが、キリスト教徒に対して法律上の手段に訴えることは、禁じられていたのである。そこで当時の村人は、事件の真相の発見については、祈祷し、おみくじを引き決議した。おみくじの結果はサイラスに不利に出、結果としては、教会員としての資格を停止された上、金の返済まで命令された。

サイラスは神も人も信じられなくなる。機織りに励むことによって、無信仰の苦しみから逃れようとするが、セアラからの一方的な婚約破棄が引き金となり、サイラスは今まで住んでいた土地に嫌気がさし、ラヴィロウ村に転居する。彼の青年期後半から中年期が始まる時期である。このようにして仕事に、恋に、そして宗教に、彼の生きがいを感じていた時期も終わる。青年期の彼の生きがいは無残にも打ち壊されてしまったわけであるが、何も生きるはりを持たないまま生活することは苦しいことである。サイラスはこの状況を乗り越え、次の生きがい探しを始める。

次の生きがいの対象は、金貨を集めることであった。友に裏切られ、恋人までとられてしまったつらさを紛らすために、機織りに打ち込んだ。仕事をすればするほど、彼の壺に金貨がたまっていった。金貨に触れ、金貨を眺める。何か特別な使い途などない。金貨が増えていくことだけに喜びを感じ、それを貯めていくのに生きがいを感じたのである。青年期の生きがいを失った時、そして金貨を集める喜びに生きがいを転じていった彼の様子が、次のように書かれている。

国境の山をこえて、生まれた土地の神の支配をうけないところへゆくことができる。……頼りにしていたけれどもついに報いられることのなかった神の力は、彼の逃れてきたこの土地からは、はるか遠い存在のように思われた。……あのひどい打撃をうけてから、彼がまず第一にとった行動はやはり織り機を織って働くことであった。……なんのために働くかを反省することもなく、しばしの休みもとらずに働きつづけた。……こうしてその仕事をするということ自体が目的になってしまうことがよくある。そして彼の一生の索漠とした空隙をうめてゆくことになるのである。……いつまで織り機を織りつづけたところで、その先なにも心に希望のない彼に、金貨がいったい何の役にたつというのであろう。……そっくり自分のものであるそのぴかぴか光った面を眺めたりすることが、愉しかったのである。……1枚1枚数えた。そしてついには、その形や色は、彼にとっては渴きを癒す清水のようにさえなった。(第2章)

すべての生きがいを失ったサイラスが最初にとった行動は、織工としての仕事にはげむことであった。仕事には責任があり、自分の都合で休んだり辞めたりすることが出来ない。仕事をすることによって、悲しい嫌な出来事について考える時間を少なくすることも出来るし、まじめな良い仕事をするのが当人の生きがいになることもある。

彼はさしあたって、大きな心の空洞を仕事によって、埋めることが出来た。仕事をすることによって、結果として金貨はたまってくる。今度は、その金貨がどの位たまっていくかを見るのに喜びを持つようになり、その金貨を貯めるそれ自体が、彼の生きる目的や生きがいへと変わって行ったのである。

マーナーは、十枚の貨幣の山が早く十倍になり、それがまたさらに何千倍にもなることを望んだ。一ギニー、一ギニーとふえてゆくことが、もうそれだけで満足であったが……それは織り機を織ったり、空腹をみたすことと同じように、今ではまったく縁のなくなった信仰や愛の生活から、かけはなれて存在している生活の一つの要素だったのである。……二十年のあいだこの不思議な金というものは、彼にとっては地上の幸の象徴であり、働くことの直接の目的となっていたのである。……すべての目的を見失ってしまった今は、金を念頭において働き、自分の努力のかがあったという気持ちで金を握る習慣が、欲望の種子をつちかうのに充分の深さのある沃土となっていた。そうしてサイラスは、黄昏の野をとおって家の方へ歩きながら、金貨をとりだしてみた。金は次第にせまってくる夕闇の中で、いっそう光りをましてくるように思われるのであった。(同2章)

これが彼の中年期の生きがいである。

しかし相手は金貨であり、会話が出来るものではない。そういうわけで、誰とも話さない日が続く。お金を貯めることに生きがいを見つけたものの、彼の心はどこか暗く閉ざされたままであった。

ふつうの正気の人ならするように、袋を踏み段の上におかず、その重い袋を背負ったまま、踏み段によりかかっているのを見た。……マーナーの顔や姿はちぢまり、前かがみになって、……人を信じ、夢見るような眼つきで、いつもものを見ていたあのとびでた眼は、今では小さな砂粒のような微細なものだけしか見えず、……まだ四十には間があるというのに、ひどくしわがよって黄色くなっていたので、子供たちはいつも彼のことを「マーナー爺さん」と呼んだものであつ

た。(同2章)

金貨を貯めることが生きがいと言っても、それは本当の人生の目標ではない。金そのものというよりは金を貯める過程に、彼は生きがいを見出している。生きがいを求めていく対象が、話しかけても答えてくれない無生物の場合よりも、話しかければ答えてくれる人間のほうが、はるかに喜びは大きいはずである。仮とはいえ彼の生きがいの対象となっていた金貨が、ある日、何者かによって盗まれてしまう。これが彼の中年期における生きがいの喪失である。

金を盗まれたこと自体は彼にとっては大きな不幸ではあったが、その代償として、次の生きがいに巡り会う。巡り会えたというよりはむしろ、次の生きがいを捜し求めていた時にエピーが現れ、彼女を育てることに新たな生きがいを見つけようとする。これは、サイラス自らが掴み取った機会である。

エピーという小さな女の子を育てる生きがいを彼が見つかるまでは、青年期も、中年期も、商売上の用事や日用品を求めに行く以外には、誰とも付き合いのない生活を送っていたサイラスであったが、エピーを育てるようになってからは、彼の生活は一変する。子育てをした経験のないサイラスには、子育て経験者からのアドバイスは不可欠のものであり、彼の周辺はだんだんと賑やかになってゆく。

真の生きがいを追求していく場合には、ひとりでは、目的は達成できない場合が多い。自分以外の誰かと接することによって、人間の輪が広がる。人間関係は複雑になっていくであろうが、自分を取り巻く世界は広がる。そして社会という歯車の一員としての活動が始まる。これが「真の生きがい」であると、筆者は解釈している。

エピーが現れたとき、彼が、この子を育てることに生きがいを感じ始め

ている様子を表している部分を抜粋してみよう。

その古い昔の生活から、彼のもとにつかわされた、なにかの使いであるかのような、夢のような気持ちを覚えるのであった。(第12章)

エピーの母親は、雪の中で、アヘン中毒のために死に絶えるが、エピーは母親の腕を離れ、サイラスの家からもれてくる光を求めて家の中に入ってくる。サイラスはエピーに気づき、彼女を抱き上げる。そしてその子の母親である死んだ女性のことを町の医者に知らせるために、村人の集まっているところへ行くのだが、そこに集まっている女性の一人が、サイラスが困っていると思い、親切にも、「それなら、この子をここにおいていったらいいじゃないの、マーナーさん」(第13章)と勧めると、サイラスははっきりと「いえ—いけません、わたくしはこの子を手ばなすことはできません」(同13章)という。その段階で、すでにサイラスは自分の手でエピーを育てようと思っているのである。

エピーは、サイラスの死んだ妹の幼かったころにそっくりであった。そのこともサイラスが自分の手で育てようと考えた理由のひとつといえよう。さらにサイラスは激しい言葉で「誰の手にも渡しません」「この子はわたくしのところへ来たのです—わたくしにはこの子を手もとにおいておく権利があるのです」(同13章)と述べる。

エピーをかわいがるサイラスの気持ちはエピーにも伝わる。エピーが困った時に発する言葉「母ちゃん」からも判るように、自分を大切に思ってくれる人のことは良くわかるのであろう。このかわいい子に心がひかれ、大人たちが彼女を取り囲む。その時、エピーは何か不安を感じてサイラスにしがみつく。サイラスが母親の代わりに自分を守ってくれているのがわかっているのである。

子供は、もう明るい光にも、婦人たちの笑顔にも気をひかれなくなっていたが、とうとう泣き出して、「かあちゃん」と呼びはじめた。そうしながらも、あくまでマーナーを頼りとするかのように、彼にしっかりとしがみついていた。(同13章)

サイラスがどんなに大切に思ったとしても、金貨はサイラスのやさしさ、思いやりに応えてくれるというわけではない。金貨を貯めることを生きがいに思っていた時のサイラスは老人と言えるような風貌であった。然し、毎日毎日成長していくエピーを育てるのは大仕事であっても、明日はどんな新しい発見が出来るかわからない楽しみ、喜びを見出す生きがいがある。真の幸せを見つけて幸せの頂点にあるサイラスではあったが、青年期には、彼の生きがいであった恋人や自分の信じていた神を奪われ、中年期にも、彼の生きがいであった金貨を奪い取られている。エピーを育てながら最高の生きがいを持って暮らしているとき、その生きがいの対象であるエピーを奪われるのではないかという不安がサイラスをおそう。あるとき、「君は、明日この子を教区の養育院に連れてゆくのかね」(同13章)と聞かれ、「誰がそんなことをいうのです」「みなさんがわたくしに、この子を連れてゆかせようというのですか」「誰か、この子を引きとってゆく権利がある、といって出てくるまでは」(同13章)とサイラスは言う。なんとしてもエピーを育てたいという気持ちが伝わってくる。

やがて、子育てを経験した村の女たちは、何も子育てについて知らないサイラスに助言を与える。彼女らも見ず知らずの子供を育てることに興味を持ち、それが生きがいともなる。村の女たちは子育てのベテランとして、また主婦として自分の家庭内のやるべき仕事を朝の10時ごろまでに終え、それ以降の閑な時間を、エピーを育てているサイラスの手伝いをするごとに、生きがいを感じている。誰かの役に立つこと、それは、人間にとって



大きな喜びである。世話をしてくれる村の女たちのなかで、サイラスが一番信用しているドリーもエピーを育てることに生きがいを感じている一人である。

うちの子供たちの一人が女の子だったら、どんなによいかと思いますね。……つくろいものや編物や、いろんなことを教えてやれたらねえ。……朝早く起きれば、お昼のしたくにとりかかるまでというものは、まるで時計が十時でとまってしまったのか、と思われることがありますからね。ですからくどいようですが、わたしはきっと子供のお世話をしますよ。喜んでやってきますとも。(第14章)

このように言われると、サイラスの心は複雑となり、育児の経験者からいろいろな助言をもらえることに感謝しつつも、自分の生きがいをとられてしまうのではないかという不安に駆られる。

いろいろ教えていただければ、それでけっこうです。……ですが、私は自分でしてゆきたいのです。そうしないと、この子は他の人が好きになってしまって、私を好きにならないかもしれませんから。私はうちで、自分だけでやってゆくことにはなれています。—なんでもわかりますよ。わかりますとも。(同14章)

せつかく捕まえた幸せ、自分の生きている証のために、エピーを育てたいという、今まで何度か失った生きがいに対するサイラスのこだわりが読み取れる。人間は、何か生きる目標を見つけた時、それを全うするために努力する。その時、真の生きがいが見つかるのである。

## 7 むすび

ハンセン氏病患者の研究者の一人、神谷美恵子は患者の生活全般を通して、「人間がいきいきと生きていくためには、生きがいほど必要なものはない。人間から生きがいを奪うほど残酷なことはなく、人間に生きがいを与えるほど大きな愛はない<sup>16</sup>」という。

仕事があり、家族があり、健康で、また生活に困らない程度のお金があり、時々、遊ぶ時間もあるといった生活を送っている人には、「生きがいを失った状態」は、もしかしたら理解しにくいかもしれない。何事もそうであるように、生きるための目標を失った時初めて、生きがいを持っていることのすばらしさを悟るようである。

有り余る時間を持て余している人たちにとって、一日の始まりは、希望というより、むしろ苦痛とさえなる。ましてや高齢期になると、健康、気力、体力、財産など失うものが増えていく一方で、閑な時間ばかりが増え、何事にも神経が過敏になり、今までのように、忙しくしている時には、気にしなかったことや、気にする必要もなかったことまでが気になってしまう。気の滅入るようなマイナス面ばかり考えて一日を過ごそうとする時、その人にとっては、朝から闇の生活が始まるようなものである。ひどい場合には、朝起き出す気力すらなくなるであろう。高齢期に鬱状態になる人が多いというのは、こうした環境に置かれていることと大いに関係がある。

時間の使い途が見つからない人々の目先の時間のつぶし方がテレビを見ることであり、そのテレビも皆喜んで見ているのかというと、必ずしもそうではない。しかし、なぜテレビをつけるのかというと、一人暮らしの高齢者で、特に仕事をもたずに家にいる人の場合、他の人と言葉を交わすことなく一日を過ごす。その寂しさを紛らしてくれるものがテレビなのである。疲れた心を癒すために、テレビを見る。それが数時間にわたるとい

場合でも、テレビをつけておけば、空間に人の気配を感じることができるから安心というのであれば、納得がいく。しかし、それ以外の理由として、何もすることがないから、テレビを見るというのでは非生産的であり、ここからは、テレビという、言わばマインドコントローラーによって毒された、ステレオタイプの皆と同じ考えや表現をする、金太郎アメのような個性のない人間が生れるだけではなからうか。テレビ以外の、もっと個々の人間性を高めてくれるようなものに時間を費やしたいものである。

「人間は、ただ、真空の中にぽつんと生きているのは、耐えがたいもので、生きる目的を持ち、自分の生きていることに対し、自分を取り巻く世界から、何か手ごたえを感じないと心身ともに生きていきにくいものらしい<sup>17)</sup>」と神谷は言う。

出来ればいくらかの報酬があり、従って何らかの義務や制約がとれない、少々の手抜きは別として、大きくは手抜きが許されないもの、そして、それが生活していく上での規律となっているのが、高齢期の人間にとって望ましい生きがいということであろう。

サイラスの人生から判るように、青年期には、青年期の生きがいある人生があり、中年期には、中年期の、そして、老年期には、一生の総まとめをするような生きがいがある人生があるはずである。それぞれの時期に自分を取り巻く環境が変わると共に、生きがいも変わっていく場合があるし、また一貫して同じ生きがいを持ち続ける場合もある。

自己の目標をしっかりと定め、周囲との調和をとりながら、自分の生きている存在価値を自他共に認めることが出来た時初めて、その人の人生の、その時期に、生きがいのある生き方が出来たといえよう。もちろん、生きがいある人生は、人によってその捉え方が異なる。ある人にとっては、さほどの生きがいを感じない人生であっても、ある人には、それは最高の生きがいある人生と言い切れる場合もある。

生きがいとは、別の表現をするならば、社会という歯車の中のひとつとして参加するところに生きる喜びを見出し、人々との相互関係の中で生れて来るものである。他人に受け入れられることなく孤独に生きるのは寂しいものであり、小さな社会の中でも、人々に存在を認めてもらうことは喜びであり、張り合いになる。それが、大きな社会の中であれば、なおさら生きる張り合いは大きくなるであろう。自己達成感、すなわち自己実現とは、社会と調和できた喜びがともなって最高のものとなる。

これまで生きがいについて筆者の考えを述べてきた。世のなかには、なにも生きがいを取り立てて考えなくとも、ただ生活していることだけで楽しいと言う人もいる。こうした人々はすでに、毎日のどうということのない些細な生活の中に、生きる喜びを上手に見つけている。

最後に、つねに生きがいを見つけていなくては行かないサイラスの言葉で、この小論をしめくくりたい。

その昔、長いあいだ彼の愛していた金貨、それだけがたった一つの楽しみであった頃、……自分が毎晩のようにそのお金をかぞえていたことや、エピーが自分に授かるまで、どんなに自分の心はさびしいものであったかということ、話して聞かせていたのであった。……「もしお金が戻ってきても、そのためにお前がわしのところになくなってしまふのだったら、一大事だ、と考えるようになったのだ。なぜって、わしには、お前の顔や、お前の声や、お前の指にさわってもらったりしなくては、どうしても、片時も生きてゆけない、という気がするようになってしまっていたんだよ。……もしわしに、お前というものが授からなかったら、わしはさびしい気持ちのまま、お墓の中には行ってゆかなけりゃならなかったろう。……お金なんか心奪われないよ。……もし、エピー、お前がいなくなるようなことが

あったら、そういうことになるかもしれない。」(第19章)

## 註

- (1) 安藤進・本間昭・高橋龍太郎『ボケを嘆くな ボケを責めるな』、KKロングセラーズ、1998年、34頁。  
東京都老人総合研究所が進めている特別プロジェクト研究「老人性痴呆に関する総合的研究」に属する3人の医学博士によってまとめられたものである。
- (2) 雑誌『毎日が発見』、ファンケル出版、16号、2000年、19頁。  
浜松医療センター脳外科の臨床データを分析・測定した結果である。
- (3) 樋口恵子「女性が握る「シニアという難問」のカギ」、村上義男編著『定年後世代の生き方・暮らし方』、平凡社、2001年、8-9頁。
- (4) 村上、前掲書、94頁。
- (5) 村上、前掲書、160-161頁。
- (6) 堀薫夫『教育老年学の構想』、学文社、1999年、2頁。
- (7) 堀、前掲書、4頁。
- (8) (9) 倉内史郎「生涯学習社会の展望」、倉内史郎・鈴木真理編著『生涯学習の基礎』、学文社、1998年、11-12頁。
- (10) D. H. Powell, *The Nine Miths of Aging* (W. H. Freeman and Company: New York, 1988) 久保儀明・楢崎靖人訳、『<老い>をめぐる9つの誤解』(青土社、2001年) 21頁。  
パウエルは認知能力に関する分析方法の開発を目的とした専門家チームのリーダーを務め、また、地域社会に住む高齢者を日常診察する臨床医。
- (11) Powell, *ibid.*, p. 24
- (12) Powell, *ibid.*, p. 25
- (13) テキストは「ペンギン版 (*Silas Marner*, 1996)」を使用し、作品の引用は土井治訳『サイラス・マーナー』(岩波書店、1998年)による。
- (14) ワーズワス (1770-1850) のMichael, 146-147行、土井治訳「マイケル」、8頁。
- (15) 荻野昌利「ジョージ・エリオットとヴィクトリア朝文学」、海老根宏・内田能嗣共編著『ジョージ・エリオットの時空』、北星堂書店、2000年、30頁。

- (16) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1998年、11頁。  
(17) 神谷、前掲書、15頁。

## 参考文献

- ・内田能嗣『ジョージ・エリオットの前期の小説』、創元社、1994年。
- ・海老根宏・内田能嗣共編著『ジョージ・エリオットの時空』、北星堂書店、2000年。
- ・子安増生『生涯発達心理学のすすめ』、有斐閣、1996年。
- ・山本節子『ジョージ・エリオット』、旺史社、1998年。
- ・Rowe, John W. and Kahn, Robert L.. *Successful Aging*. International Creative Management Inc.: New York, 1998.
- ・Karl, Frederick R.. *George Eliot, Voice of a Century: A Biography*. W. W. Norton & Company Inc.: New York, 1996.
- ・Teacher, Janet Bukovinsky. *Women of Words*. Running Press: Philadelphia, 1994.